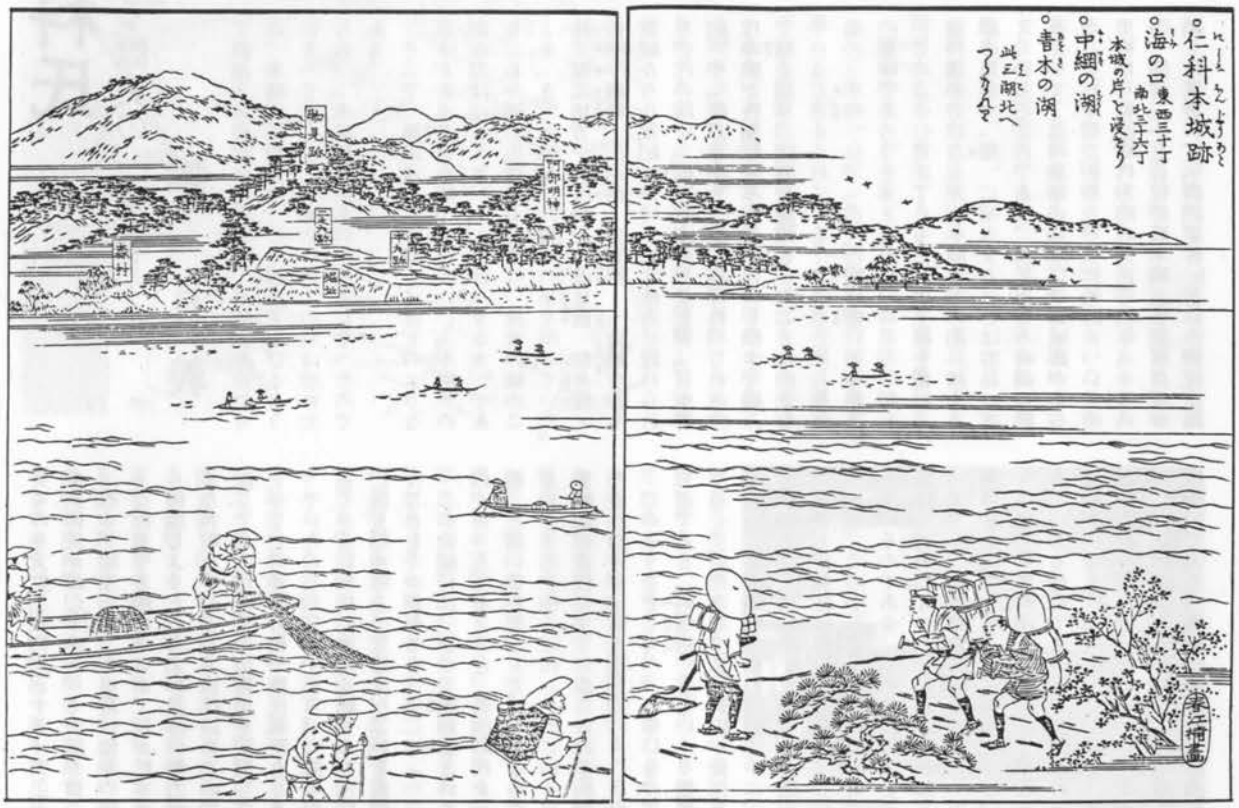
山と博物館

第33巻　第4号　　1988年4月25日　　大町山岳博物館



「善光寺道名所図会」に見える木崎湖風景

江戸時代の木崎湖風景

天保十四年（一八四三）、『善光寺道名所図会』という紀行文を著わした美濃の人豊田利忠は、木崎湖を訪れてその風景を忠実に描き、同書に載せています。当時木崎湖は「海之口池」とよばれていましたが、その東岸を通じる糸魚川街道は、越後の糸魚川から信濃の松本へ通ずる重要な街道であり、特に糸魚川から入ってくる魚介類や塩、さらには遠く畿内方面からの上方文物や生活用品が想像を超えて多く、また松本・大町方面から出ていく麻・苴・木工品などもかなりの量に上っています。これらはすべてこの街道を人の背や牛馬の背によってもたらされたものでして、図中手前の右はしに、荷杖を腰に支込んだ二人のぽっか（「歩荷」の字を宛てる）が、こも包や箱荷をそれぞれ背負って大町方面へ向かっているのが見えます。松本城下での出入荷物は糸魚川街道経由のものが圧倒的に多かったといわれますから、この街道の運輸の賑わいもさこそと思われるのです。まんじゅう笠の旅人も三人みえます。大小を腰に差し、振り分け荷物の武家らしい旅人、両杖をついた老女らしい旅人、さらには笈のような箱物を背にし、椀様のものを箱につるした老翁らしい旅人など江戸時代の旅姿を目のあたりにさせてくれます。

湖上には魚篭を舟に載せ、腰蓑を着けた漁師が投網をしています。仁科三湖ではアカウオ（ウグイ）やワカサギ・ウナギなどが江戸時代によくとれ、青木湖の場合には、天正十九年（一五九一）に「青木之郷定物成」としてウグイ二百疋を海の役と称する租税に松本城主石川氏へ提出することを義務づけられていたことが文献に現われています。昔も今も変わりなく内陸での水産物に恵まれた仁科三湖でありました。

対岸には森城跡と森村、さらには阿倍明神の社叢が臨まれます。この史的考察を地名によってすることは、本号の本文でしているところです。

（幅具義）

森城跡と仁科氏

―地名から推定する歴史の一試論―

幅　具義

仁科三湖のうち「木崎湖」は近代になって命名されたもので、江戸時代には「海之口池」と呼ばれていた。「木崎湖」の名は、大町市大字平の木崎集落の名に由来するものであることは論をまたないが、集落名の「木崎」はいつの時代からこのように命名されたのか明らかな史料がなく、江戸時代のごく初めに記録されたとみられる『筑摩安曇両郡郷村御朱印御高附』に、「九拾五石六斗九升三合木崎村」とみえるのが文献上の初見であって、たかだか今から四百年足らずの昔の呼称であるというにすぎない。ただここで明らかなことは、「木崎湖」という名が集落名の「木崎」から命名されているという前後関係だけは明瞭であって、特に大町から小谷方面に向かって鉄道大糸南線が開通され、木崎駅が設けられ、木崎湖が観光地として脚光を浴びるようになってからは、「海之口池」の名は忘れ去られ、「木崎湖」の名のみ有名になったのである。

図1　木崎湖に臨む森城跡

そこで、集落名の「木崎」にはどのような意味があるのかを探ってみたい。「木崎」の訓み方は「きざき」もしくは「きさき」である。わが国の古代においては、後世の城のことを「き」と呼び、「柵」の字を用いていた。遠く東北地方や北陸地方に淳足柵・磐舟柵・都岐沙羅柵・出羽柵・多賀柵・玉造柵など七世紀から八世紀にかけて東北地方に設けられた古代の城を「柵」とよんだことが『日本書紀』や『続日本紀』に多くみられ、これは古代の城が外周に竪木をし、これを横木で編んで柵を造り、防禦の施設としたことに由来していると考えられている。このことから集落名の「木崎」は、「古代の柵の前にある集落」の意味であろうと考えられる。

このように考えてくると、屋上屋を重ねる論の進め方になるが、木崎集落の北に接する森の集落が「柵」に相当することは容易に考えられるところであり、森集落は木崎湖に臨んでいて、この集落の北端には森城跡があるが、これが柵であろう。この城跡についての史料は、戦国時代末期の天正十二年（一五八四）四月二十五日付の松本城主小笠原貞慶が発した文書に、「森之要害」という表現が見えるのを文献上の初見とする。天正十年に甲斐武田氏が滅亡すると、その跡を襲って深志（松本）城主となった貞慶は祖先の旧領であった松本平を領有するが、彼が松本平を北から侵攻しようとした上杉景勝の勢力に対抗し、また大町を中心として古代以来この地方を支配してきた仁科氏の旧勢力を征服して配下にするなどの軍事行動や撫民政策をしきりに行っていたころの文書である。「森の要害」は古くから仁科氏の重要な城であり、仁科氏滅亡後も松本城主小笠原氏がこれを重視していたことをうかがわせる。

この森城には、かつて森の柵といわれた時代があったと考えると、戦国時代からは遙か遡った遠い昔を想定しなくてはならない。すなわち大和政権の時代とそれに続く奈良・平安時代の古代にすでに森には城塞施設があったとしなくてはならない。

このようなところへ、近年になって古代の官道である「御坂道」ともいえる重要な古道が通じていたと記す文献資料が発見された。それは、江戸時代中期の文書の中に、現小谷村北部を「三坂峠道」と表現する道が糸魚川方面から信越国境の山地を越えて小谷に通じており、この小谷に「三坂峠」があったと記しているのである。この峠の位置を考古学的発掘が行われていない現在では明確にしえないまでも、実地踏査の結果では北小谷の深原集落から山地を北上した標高一二〇〇メートルほどの真那板山地の鞍部で、現在一本杉の古木のある地点であろうと推測される。小谷地域の古老も、そのあたりの峠を「みさか峠」と古くから呼んでいたといっているところから、ほぼ間違いあるまい。「三坂峠」は「御坂峠」である。周知のように、信濃には万葉集の歌にも登場する東山道「神坂峠」が下伊那郡の信濃と美濃の国境にあり、また北信の信越国境には「深坂峠」があり、さらに野尻湖の近くに「見坂の峠」があるなど、用字こそ異るがいずれも「みさか峠」と呼んでいて、古代の官道である御坂峠・御坂峠道の存在を証明している。「峠」は平安時代の国字として登場する文字・用語であって、それ以前は峠のことを「坂」と呼んでいた。今では傾斜面を坂というが、古くは、こちらの世界とあちらの世界を堺いする意味、すなわち峠の頂上を意味していた。峠には地の霊・生物の霊の存在を信じ、そしてそれを祀ることが行われた遙か古代、峠は神のよります所とされていたのであって、峠越えの神事が厳粛に行われたものである。祭祀遺物が小谷の三坂峠想定地からはまだ発見されていないが、一日も早い発掘調査がまたれるものである。

図2　北小谷の三坂峠推定地（中央鞍部）

北陸地方から小谷に入ったいわゆる「御坂峠道」は小谷・白馬地域の山地を小蛇行しつつも大局には南へ向けて直進し、山峡を抜け

出たところで「森の柵」に達し、さらに松本平を南進しているようである。この道は、いったい何の目的をもって開道されたものであろうか。ここに考えられることは、大和政権以来国の重要施策であった反大和政権勢力である蝦夷の掃討のためであろうと故一志茂樹博士は定義づける。記紀に見える大彦命の越の夷の征討以来、長年月にわたって続けられた征夷のためには、その兵站基地を前進する先々で設けていかなくてはならない。大彦命の子孫であるとして大和南部の飛鳥地方に出自をもつ古代氏族阿倍氏やその分脈の布制氏が築営したとみられる古代集落が、畿内の琵琶湖北東岸をはじめとして越（後の越前・越中・越後から出羽にかけての一帯を指す）に散見することがこの証拠であると一志博士は説く。北信の「深坂峠」・「見坂の峠」を越えて信濃に入り高井地方・篠之井地方に定着したのはこの勢力のうちの布制氏であるとみられる。これと同様に森の柵を築き、ここを基地として良質の地を選んで開発を進めていったのは阿倍氏であろうと想定される二つの地名がある。

森城跡の本丸は東西二十六間・南北三十六間ほどの高い台地であるが、その北の低地に「阿倍神社」がある。この祠は森集落の鎮守として古くから祀られ、阿倍明神の神体の木像を二体祀るという。おそらく森の柵に拠っていた阿倍氏の祖神を祀るのではなかろうか。

また、木崎湖北東岸の東海之口の小字名に「あべっと」がある。海之口駅が設けられたため、「あべっと」の祠は湖岸に移動しているが、この呼称からして、「あべっと」は「阿倍戸」であり、阿倍氏の集落の入り口を表現しているように考えられる。このように地名上からみれば森の柵は阿倍氏によって開設されたと想定されるが、ここにさらに興味ある史料が存在する。

平安時代中期以降大町を中心にこの地方を広く領有支配していたことの確実な仁科氏の家には、仁科氏の祖先は阿倍氏であるとの伝承があったと記録する元和二年（一六一六）の史料があることである。記録者は仁科家の女性を祖母にもつ小笠原秀政の家臣の原雅尚である。ただ阿倍氏の出であるとはいえ、東北地方の豪族安倍貞任の子孫であると記していて、長い年月の間に大和の阿倍が東北の安倍と誤り伝えられるようになったものであろうと推察する。仁科氏は、平安時代後期になると平家との縁をもつようになったとの伝承を併せ記していて、遥か平安以前の阿倍氏が大町市南部特に社地域南部を開発するようになってから、仁科神明宮一帯を祢していた地名「仁科」を姓とするようになったものであると推定する。

このように考えてくると、「森の柵」は「森之要害」と称えられるようになるまでの古代から中世末期まで長い年月、阿倍氏すなわち仁科氏が一貫して城塞とし重要視してきたものであろうことが想像される。

森城跡一帯の地図に土地台帳や地元の人々の呼称するところによって地字名を表現してみた（上図）。これらの中の丸で囲んである地名が城跡に由来する地名とみられるが、長い年代にわたる城郭のため地名の変遷もあろうし、また地名呼称が果たしていつの時代のものであるのかも明確でない。「杭田」・「杭モト」・「古杭田」などは古代の森の柵の証拠を端的に表現しているように考えられるが、これをも含めて、地名のさらなる深い考証がなされなくてはならない。

（大町市文化財審議委員長）

図3　阿倍氏を祀る阿倍神社

図4　「阿倍つ渡」の神祠（東海之口）

スイス山岳博物館

SCHWEIZERISCHES ALPINES MUSEUM

草刈清人

地図コーナー　測量の道具が並んでいる

博物館の外観　1階、地下1階は通信博物館

ベルンは首都というイメージからは遠い、落ちついた町である。町の中をU字型にアーレ川が流れ、古い町並みが残っている。中心部の約1・5キロ四方に12の博物館がある。いろいろな博物館が開設されている大町市とやや似ているかもしれない。

アーレ川を渡ってすぐの広場に面して山岳博物館は建てられている。向かい側には歴史博物館、直ぐ近く自然史博物館などがあり、ちょっとした博物館ゾーンとなっている。

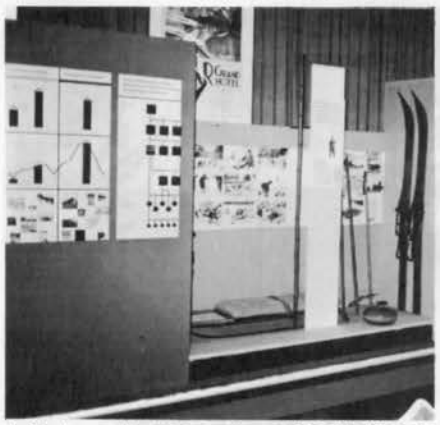
山岳博物館の創設は1905年。ここの展示は大きく、「山岳の自然」、「アルプスの民俗」、「登山の歴史」の3分野を含んでいる。「山岳の自然」は地形、地質が中心で生物の展示はほとんどない。岩石標本も少なく、地形模型、地図、山の絵などを中心に構成されている。特に山岳模型は沢山あり、芸術作品といってよいほど精巧に美しくできている。大きな地形模型は上から眺められるように、観覧台も作られていた。色々な測量器具が展示してあるのも印象に残った。大町でも地形図や地質図の話をもっと取り込むのは、どうだろうか。生物は近くの自然史博物館で展示しているそうだ。

「アルプスの民俗」では、民俗衣装や祭りに使う小面、山小屋（シャレー）の模型などが展示されていた。

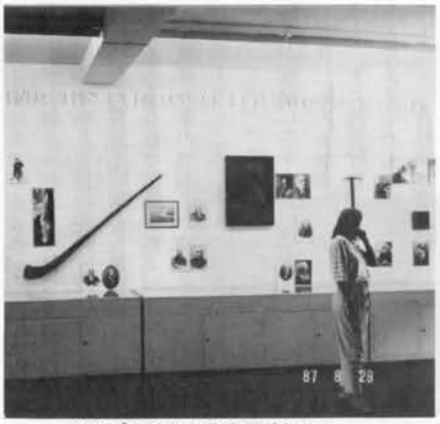
「登山の歴史」は登山用具の実物、登山者の人形、アプト式鉄道の歯車や線路、スイスらしい清潔な感じのグラフィックパネルなどで構成されている。アルプス登山史を総合的に紹介するパネルは道具の実物や古い写真をうまく取り込んだもので印象に残った。この日本アルプス版を山岳博物館のPRも兼ねて、信濃大町駅あたりに置くと良いと思った。

スイス山岳博物館は建物の二、三階を占め、一階、地下一階は通信博物館になっている。アルプスといえば世界的に有名で、また郵便もベルンに万国郵便連合の本部があるというのに、建物は素っ気ない、よくいえば清潔で簡素な、病院か庁舎といった風情である。展示も同じで、まとまってはいるが、見学者を引きつける演出がもう少し欲しい気がした。

（丹青総合研究所主任研究員）



ウインタースポーツのコーナー　図表の処理がうまい



アルプスの登山史総合パネル
ピッケルなど実物も取り付けてある

博物館だより

春の草花と山菜展

5月28日(土)から6月1日(水)まで講堂で開催。約二百種類の草花や山菜を、鉢植えと生け花で展示します。（本展のみ無料）

編集上の都合で発行が大幅に遅れました。おわび申し上げます。

山と博物館第33巻第4号
一九八八年四月二十五日発行
発行所　長野県大町市　TEL22〇二一一　大町山岳博物館
印刷所　長野県大町市唐町　大糸タイムス印刷部
定価　年額　一、二〇〇円（送料共）（切手不可）
郵便振替口座番号（長野四―一三二九三）